愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第42巻　第1号　37～40　1995

読解過程に及ぼすヒントの効果に関する研究

佐　藤　公　代
（教育心理学研究室）

（平成7年4月28日受理）

問題と目的

本論は，佐藤公代（1995）の「読解過程に及ぼすヒントの効果に関する研究」において，被験者の大学生の結果を，もう少し詳細に見直そうとして行なった研究である。

どこに何が書かれているかが一目見てわかるようにするためのヒントをいくつか与えることによって，文章を視覚的にとらえ，書き込みという能動的な作業も行わせる。

仮説は次の通りである。

①ヒントを与えられた群の方が，与えられない群よりも理解，伸び率が良いであろう。

方　　法

1）実験期日：1994年11月22日～30日

2）被験者：E大学教育学部3回生　72名

3）実験材料

「例の方法」（有坂誠人著，学習研究社）と「現代文・満点への公式12」（村井義應著，ごま書房）の本の中から選んだ問題文3題と，それらの問題を解くためのヒントを用いる。

構えをつくるヒントには，次の4つを考える。

①，文章中に，同語（同じ言葉），同義語（同じ意味の言葉），同義文（同じ意味の文章）が，部分的に集中するかたちであったら，○で囲んで線で結ぶ作業をするように教示する。（論文の最初から最後まで出続けるものは意識にとどめるだけ）

②，①と同じで，反意語，反意文，縁語に対しても○で囲んで線で結ぶ作業をするように教示する。

③，＋のイメージと－のイメージを与える言葉に，＋か－の印をつけるように教示する。

④，ある状況を規定する言葉に印をつけていくように教示する。

以上の4つの教示のうち，文章を理解していくために必要に応じたものを用いる。

ヒントを使って解くやり方は，初めての人が多いので，どのヒントをどの問題に使うかも教示する。

また，今回用いた問題文は，説明，論説文，小説文と変化に富むものであるため，ヒントをもとに，一定のルールに従って書き込んでいくことで論理を組み立てることが，文章理解におけるポイントとなる。

付表1にヒントの内容を示す。

4）条件

Ⅰ群：ヒントを与える教授群

Ⅱ群：ヒントを与えない統制群

5）手続き

事前テストでは，自分独自のやり方で解いてもらう。事前テストの結果から，等質に2群に分け，Ⅰ群にはヒントを与える教授をし，Ⅱ群には教授をしない。1週間後，事後テストを行なう。

6）得点の方法

正答1点，誤答0点とする。事前，事後テストは5点満点，転移テストは4点満点である。

結果と考察

Fig. 1に事前テストにおけるⅠ，Ⅱ群の平均点を示す。

Fig. 1から，Ⅰ，Ⅱ群は等質である。

Fig. 2に事後テストにおけるⅠ，Ⅱ群の平均を示す。

Fig. 2から有意差がみられないもののⅠ群の方の得点が高い。

Fig. 3にⅠ群の事前テストと事後テストの得点の変化を示す。

Fig. 3から，ヒントを与えずに自分流のやり方でやったよりも，ヒントを与えてそれを用いてやった方が得点は高い。

事後テストの得点から事前テストの得点を引いた伸び点の合計を人数で割って，100をかけ，伸び率をFig. 4に示す。

Fig. 4から，1％水準でⅠ群の方の伸び率が高い。

よって，仮説①は支持される。

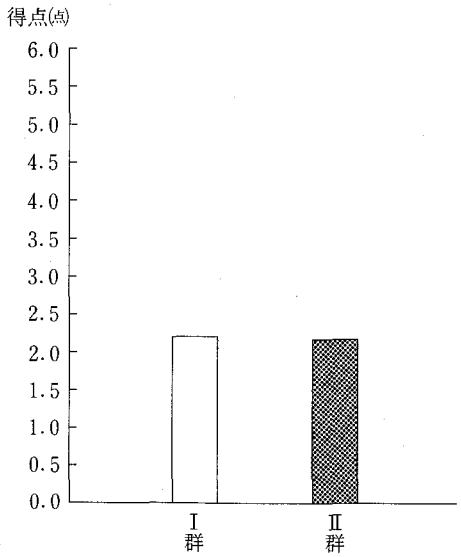

Fig. 1　Ⅰ群とⅡ群の事前テストの得点の比較

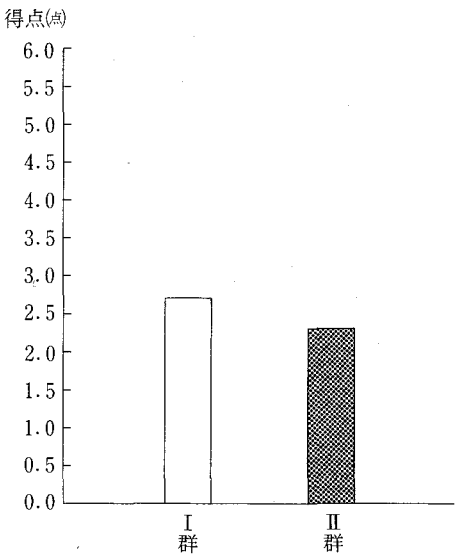

Fig. 2　Ⅰ群とⅡ群の事後テストの得点の比較

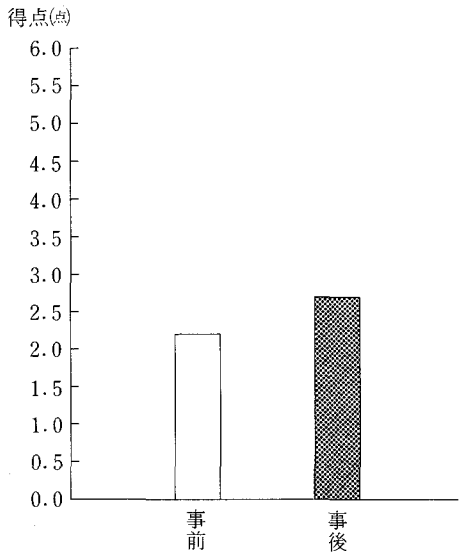

Fig. 3　Ⅰ群の事前テストと事後テストの得点の比較

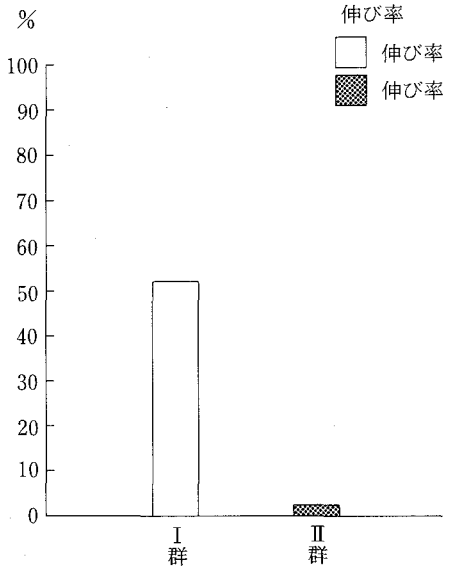

Fig. 4　Ⅰ群とⅡ群の得点の伸び率

以上から，ヒントを与えることによって，問題を解くことに集中し，その結果，理解も深まるというように，難しい文章においても，ヒントが何らかの手助けとなることがわかる。また，ヒントがあっても，それが確実に身について，完全に自分のものとして，自由に扱えなければ大きな効果はないといえる。

結　　論

①事後テストにおいて，Ⅰ群の方がⅡ群より成績が良く，Ⅰ群において，事前テストより事後テストの方の得点は上がっている。伸び率においては，Ⅰ群の方がⅡ群より有意に高い。

引 用 文 献

稲川三郎　1979　学び方国語　学陽書房
北尾倫彦　1991　学習指導の心理学　有斐閣
佐藤公代　1995　読解過程に及ぼすヒントの効果に関する研究　愛媛大学教育学部紀要第Ⅰ部　教育科学　第41巻　第2号　29－38

付　　記

実験者の廣澤奈央子氏，被験者の皆様に御礼申し上げます。

付表 1

4つの作業

文章問題を解くヒント

1 同　語→同義語→同義文

2 反意語→反意文→縁　語　同語群 *

↓（なければ作る）

■部分的に集中する同語群に印をつける。

× 論文の最初から最後まで出続ける同語群は意識にとどめるだけ。

* ○で囲んで線で結ぶ。

文章中に同語（同じ言葉）、同義語（同じ意味の言葉）、同義文（同じ意味の文章）あるいは、反意語、反意文、縁語（「古典」でいう〝縁語〟－川・水・船・波など）などがあったら、論文全体の意味はまったく無視して、ただ機械的に印をつける。

3 ⊕ or ⊖

⊕→明るい、楽しい、大きい、早い、美しい、および著者の主張に近づこうとする言葉。

⊖→小さい、暗い、悲しい、汚ない、ブスなど、素朴にマイナスイメージを与える言葉。

完了形表現（～てしまった）。および筆者の主張から遠ざかろうとする言葉。〝筆者の主張…云々〟は大ざっぱなものでよい。たとえば、公害論文でいえば、この筆者は公害に賛成なのか、反対なのか、程度のこと。賛成意見に近づく言葉なら⊕、反対なら⊖の印をつける。これもやはり文章全体の意味に関係なく、ただ機械的に印をつける。

〈文章の場合〉

※この作業の視点で見ると、Aの部分はマイナス。

⊖ A　ではなく　B　である。⊕

4 規定語…ある状況を規定する言葉に印をつける。

(1) 逆説接続語

しかし、けれども、とはいうものの、とはいっても、だが逆に、反対に、むしろ、他

□で囲む。

A　しかし　B

⊖……⊕

⊕……⊖

(2) 順接接続語

ゆえに、よって、したがって、だから、つまり、～のため（に）、すなわち、たとえば、いわば、ようするに、なぜならば、というのは、いいかえれば、他

逆三角形▽の印をつける。

B　~~ゆえに~~　B

⊖……⊖

⊕……⊕

(3) 係助詞→「も」……同じパターンの事柄を二つ以上並列する時に使う。

○で囲む。